

## 天井裏の大地震記録：棟札地震史料 収集と考察

## Ridge Board as Materials for the History of Japanese Earthquakes

# 矢野 信[1], 中西 一郎[1]

# Makoto Yano[1], Ichiro Nakanishi[1]

[1] 京大・理

[1] Dept. Geophys., Kyoto Univ.

棟札とは上棟式のときに棟木に打ちつける札のことで、建物の由緒・工事年月日や建築主（施主）・工事担当者（工匠）の名前などが記載されているが、この中に地震や津波に関する記載が見られる。既刊の地震史料集（「増訂 大日本地震史料」「日本地震史料」「新収日本地震史料」「日本の歴史地震史料拾遺」）には、地震史料としての棟札銘文は15点しか収録されておらず、これまで、地震史料として収集の対象になっていなかった。

歴史地震史料としてみると、棟札（および棟札銘文）には次のような特徴がある。(1)紙製史料のない寺社にも比較的よく保管されている。政治・文化の中心地から離れていて文献史料の量が乏しかった地域でも新たな史料発見の可能性がある。(2)建物に被害を与える大地震・津波について記載されていることが多い。(3)文献史料と比較して移動がきわめて小さい。(4)建築工事の際にのみ作成されるので時間軸を連続的にカバーしていない。

今回の調査では、「棟札銘文集成」（国立歴史民俗博物館）を始めとして、棟札銘文の調査結果が収録されている書籍の調査を行った。また、文化財建造物の修理工事報告書や都道府県／市町村史などの史料編なども調べた。一部については、翻刻された活字と現物との比較・検証と、現在の所蔵地・記載された被害位置の確認を行った。

収集した棟札銘文は30点あり、うち25点は既刊の地震史料集に未収録であった。「棟札銘文集成」には東北～九州地方で国宝・重文に指定されている建造物の棟札銘文が収録されており、同じ寺社内であっても、国宝・重文指定がない建造物の棟札は収録されていない。また、都道府県・市町村の単位で棟札全体が行われ調査結果が刊行されている例は極めて少なく（今回調査できたのは1県、2市、5町）（歴史地震の分野によらず）調査がなされていない棟札の数のほうが圧倒的に多い。これらの全国的な調査が行われれば、新たな地震史料が発見される可能性は十分にあると思われる。

今回の調査では、佐波神社（静岡県西伊豆町）所蔵の八幡宮享保二年棟札について、現地・現物の検証を行なった。この棟札の銘文は、既に「増訂 大日本地震史料」2巻に収録されているが、この銘文を地震史料として直接用いた考察はこれまで行われていない。次に示すのは、この棟札の銘文の抜粋である。

享保二年より十四年先申之年霜月廿三日明ヶ夜二大ぢ志んゆり津奈ミあがり申候 伊豆下田八大乱二而御座候

後前にぢ志ん切々御座候 末々のため如此候以上

享保二年（1717年）成立の棟札に元禄十六年（1703年）の元禄地震についての地震・津波および伊豆下田に関する記述がある。宝永地震（宝永四年十月四日 / 1707年10月28日）はその間に起こっているが、棟札の記述では触れられていない。宝永地震の震源域が駿河湾の奥まで達していたとすれば、伊豆半島西岸には、従来考えられているように大きな津波が到達しているはずであり、地震・津波によって大きな被害が出ていたはずである。そのことを飛ばして元禄地震のことだけを記すのは不自然であると思われる。ここから逆に、宝永地震のときに伊豆半島西岸には大きな被害をもたらすような津波が到達しなかった、と考えることができる。それが正しければ、宝永地震の震源域の東端は、駿河湾の奥まで達していないことになる。